日本女學讀本　卷八

K230.8
59
8

K230.8
59
8

523

下田歌子 監修
帝國婦人協會 編

日本女學讀本

文部省圖書
新6783
共8冊

東京 株式會社 明治書院
1951. 文部省寄贈

文部省圖書
目録

日本女學讀本 卷八目次

卷頭 今上天皇陛下御即位式の勅語
一 大嘗祭……一
二 立太子禮賀表……山川健次郎……六
三 人臣の道……北畠親房……九
四 重盛諫言……一六
五 最後の參内……二八
六 四條畷(韻文)……中村秋香……三四
七 妹辰子を祭る文……落合直文……三八

八、哀傷……稅所敦子……四四
九、夫を亡へる遠國の友へ　同返事……四八
一〇、世界の歌枕　その一……上田敏……五一
一一、同　その二……同……五六
一二、月の洞庭湖……佐々木信綱……六三
一三、俚諺十則……六七
一四、四季の歌（韻文）……六八
一五、四季の變遷……吉田兼好……七二
一六、恩愛の道……同……七六
一七、日野山の山奥……鴨長明……七八
一八、小品三章……八三

一九、扇の的……八八
二〇、芳流閣上の搭鬪……瀧澤馬琴……九四
二一、春日の局　その一（脚本）……福地櫻痴……一〇二
二二、同　その二……同……一〇九
二三、婦人の天職……下田歌子……一一七
二四、世界戰爭の顚末……一二四
二五、日本の使命……大西祝……一三八
二六、卒業式（韻文）……森本常吉……一四四

卷八目次終

自錄ニ「御即位禮」「新語」ヲ奉シテ本文ヲ

日本女學讀本　卷八

一、大嘗祭

芳賀矢一

仙洞御所
朝集所
森嚴

十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所へ參集。世界に類の無い森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩い程の電燈の光、一々呼び上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舍に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がホン

幄舍

庭燎

ノリ、と明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの暗の夜である。

稻舂歌

一聲長い笛の音が樂舍から起つて、稻舂歌が高らかに吟ぜられる。徐に嚴かな調子で、神々しさが身に沁むやうである。稻舂歌が終つて稍しばしのほどを經て、再び歌聲が起る。

國風

今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が、起立着席を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身は宛ら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長

風俗歌

端坐凝念

廻立殿

の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫る樣に覺える。余が着座したのは左方の幄舍で、折しも八日か九日の月が松の葉越しに白砂の上を照す。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調な樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には、人の音は全く無い。眞に莊重嚴肅を極めたものである。此の莊重嚴肅な御祭は、太古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。

莊重嚴肅

悠紀殿

朝集所へ立ち戻つて、夜食を賜る。暖い御酒、熱い吸物、幾度

か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れ果てる。十五日の午前一時三十分、再び幄舍の座に着く。老齢の大官達が拜辭して退下したためであらう、幄舍の座席は、以前よりも廣くおぼえる。此の度は樂舍が近いので、歌樂の音も一層鮮かに聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身に沁むと共に、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭の果てたのは午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜る頃、東の空は漸く明るくなつた。

十日の卽位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照す大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに

肅然

威儀の人

默想

引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てゝ、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。唯「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語は無い。卽位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旛古き國史の跡を考へて、いよ〳〵國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。此の太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念

感激

して、我が國體の尊嚴無比なことに今更のごとく感激するのであつた。

二、立太子禮賀表

東京帝國大學總長理學博士男爵臣山川健次郎謹ミ畏ミテ白ス。

皇太子殿下今日ノ佳辰ヲ以テ立儲ノ大禮ニ膺ラセ給ヒ、壺切ノ御劍ヲ受ケサセ給フ。洵ニ皇室ノ慶典、國家ノ隆儀ニシテ、萬民ノ齊シク歡喜シ奉ル所ナリ。恭シク惟ルニ寶祚ノ隆エマサンコトハ、天地ト共ニ窮ミナカルベシト宣ヒシ神敕ノマニ〳〵、橿原ノヒジリノ御代ヲ始メテ、樛ノ木ノイヤ

壺切の御劍

千早振

遺烈

ツギ〳〵ニ、御代知ロシメシテ、今ノ大御代マデ、世ハ百二十二代ヲ數ヘ奉リ、年ハ二千五百七十六年ノ久シキニ渉レリ。敷島ノ大和心ヲ本トシテ國民ノ盡ス誠モ、千早振神ノ御心ニ叶ヒ、君ト臣トノ中ラヒニハ父ト子トノ親シミアリテ、世界ノ國々ニ雙ナキ國體ヲナセリ。

明治天皇萬ノ政ヲ新ニシテ、中興ノ業ヲ建テ給ヒシヨリ、國ノ光ハ四方ニ輝キテ、外國人モ皆其ノ御威德ヲ仰ギ奉レリ。

天皇陛下、

明治天皇ノ偉績ヲ紹ガセ給ヒ、列聖ノ遺烈ヲ振ヒ給ハントシテ、去年ノ十一月ニハ御卽位ノ大典ヲ擧ゲサセ給ヒ、今

年ノ今日ハ立太子ノ盛儀ヲ行ハセ給フ。帝國ノ臣民タルモノ誰カ祝賀ノ忱ヲ表サヾラン。今日ハ

明治天皇ノ御誕辰ナリ。

明治天皇ハ明治二十二年ニ憲法ヲ布キ典範ヲ定メ給ヒ、其ノ年ノ今日、

天皇陛下ヲ東宮ニ立テサセ給ヒキ。今ヤ

殿下ハ此ノ記念スベキ日ニ立儲ノ大禮ニ膺ラセ給フ。既往ヲ稽ヘテ將來ヲ思ヘバ、天ツ日嗣ハイヨ〳〵隆ンニ、御國ノ基ハマス〳〵堅シ。伏シテ惟ルニ、

皇太子殿下御心ハ澄ミ渡リタル大空ノ如ク廣クオハシマシ、學ノ道ハ功アル人ヲ師トシテ、朝ニタニイソシミ給フ。

常磐ニ堅磐ニ

殿下ノ尊ク嚴シキ御身ハ、國ノ鎭ト雲ニ聳ユル富士ノ高根ノ如ク、常磐ニ堅磐ニオハシマセト祈リ奉ル心ヲ、今日ノ慶典ニ當リテ、臣健次郎、本學ノ職員、學生、生徒一同ニ代リテ、謹ミ畏ミテ白ス。

大正五年十一月三日

東京帝國大學總長正三位勳二等理學博士男爵臣

山川健次郎

（東京帝國大學）

コンナ書ヲ綴ルモアルコトカ

三、人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ず之を身の高名と思ふべきに非ず。されど、後の人を勵ま

前車の轍

し、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有り難きならひなりけんかし。中古までも、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

制符

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源・平の家に屬することを停むべし。といふ制符たび〳〵ありき。源・平久しく武をとりて仕へしかども、事あるときは宣旨を賜りて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、此の制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。

家の子郎從

言語は君子の樞機

堅き氷は霜を履むよりいたる

亂臣賊子

此の頃の諺には、一たび軍にかけあひ、或は家の子・郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては、日本國を賜へ。」もしは、「半國を賜りても足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまでおもふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、又朝威のかろ〳〵しさも推し量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣・賊子といふものは、其のはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰

五臟六腑

萬姓の主

ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず。人の心のあしくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父これを聞きて、此の水をだにきたながりて渡らざりき。其の人の五臟・六腑の變るにはあらじよく思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて限なき人に頒たせ給はんことは、推してもはかり奉るべし。もし一國づゝを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。

一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬の人は悅ばじ。いはんや日本のなかばを心ざし、皆がら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面にも恥づる色の無きを、謀叛のはじめとはいふべきなり。

北畠親房

昔の將門の、比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正

しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけんを、今は人々の心のかくのみなりにければ、此の世はいよ〳〵衰へぬるにや。

漢の高祖の天下をとりしは、蕭何・張良・韓信が力なり。こを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは此の人なり。」と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留といひて少しきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先

籌を帷幄の中にめぐらす

陣にて其の功すぐれたりければ、五十四郡のうちいづくをも望むべかりけるに、長岡郡とてきはめたる少しき所を望みて賜りけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや。賢かりけるをのこにこそ。

又、直實といひける者に一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるが、「褒美の詞の甚しきに、與へたる所のすくなき、まことに名を重くして利を輕くしける、いみじきこと。」と、口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけんと、いとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみおほくなれり。ありし世の

東國の風儀もかはりはてぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと、歎くともがらもありと聞えき。

（神皇正統記）

黒絲縅の腹卷

銀の蛭卷

中門の廊

四、重盛諫言

太政入道はかやうに人々數多いましめ置いても、獨心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜られたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕をはなたず立てられたりしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色

木蘭地の直垂

ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋縅の鎧きて、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかゞおもふぞ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましく、しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月、信頼・義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内にたて籠り、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てゝ凶徒を追ひ落し、經宗・惟方を召し禁めしにいたるまで、君の御爲に既に命を失はんとする事度々に及ぶ。さ

院宣

れば、人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共が中より矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は、入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。きせながら取り出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ參つて、「世ははやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の頭の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍共も皆打ち立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんとは候へども、內々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ擬せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何に依りて只今さる事のおはすべきとは、思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともやおは

ずらんとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各、いろ〳〵の直垂に思ひ〳〵の鎧着て、中門の廊に二行に着かれたり。その外、諸國の受領・衞府・諸司などは、緣に居こぼれ、庭にもひしとなみ居たり。旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打ち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子・直衣に、大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

卿相雲客

烏帽子直衣大紋指貫

入道伏目になつて、「あはれ、例の内府が世をへうする樣に振舞ふものかな。大きに諫めばや。」とは思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮義を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着て對はんこと、流石おもはゆう、はづかしうや思はれけん、障子を少し引き立てゝ、腹卷の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣を引き違へ〳〵ぞし給ひける。

五戒五常

素絹

胸板の金物

大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、

これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道「さて、いかにや、いかに。」とあきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を押へて、「この仰承り候に、御運は早、末になりぬと覺え候。人運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又、御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺え候はず。流石、我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふ事、禮義に背くにあらずや。就中、御出家の御身なり、忽に法衣を脱ぎすてゝ、甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさん事、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外

邊地粟散の境

破戒無慙

には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたゞ〳〵恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。

普天の下率土の濱

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王土に非ずといふことなく、率土の濱、王臣に非ずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命背き難き禮義をば存知すとこそ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。これ、希代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひ

蓮府槐門

希代

非禮

傍若無人

執

て、亂りがはしく法皇を傾け參らせさせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず、中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて四海の逆浪を鎭めしことは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に、「人皆心有り。心各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。爰を以て縱ひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。」とこそ見えて候へ。然れども、當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給

冥慮感應

敍爵

ひ候ひぬ。その上、仰せ合せらるゝ成親卿を召し置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡し、民の爲には益撫育の哀憐を致させ給はゞ、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。

君と臣とを比ぶるに、親疎わく方なし。道理と僻事とを並べんに、爭でか道理に附かざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、協はざらんまでも院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかし

ながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にも過ぎたらん。然らば、院中に參り籠り候べし。その儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これらを召し具して院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はゞ、流石、以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。

迷廬

悲しいかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりも猶高き父の恩、忽に忘れなんとす。痛ましいかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退、維谷れり、是非、いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又、院中をも守護し參らすべからず。されば、かの蕭何は大功かたへに越えたるに依つて、官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上に昇ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重う戒めて、深う罪せられにき。斯樣の先蹤を思へば、富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷む」と見えて候。心細うこそ候へ。何時までか命生きて、亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に遭ひ候重盛が果報の程こそつた

先蹤

果報

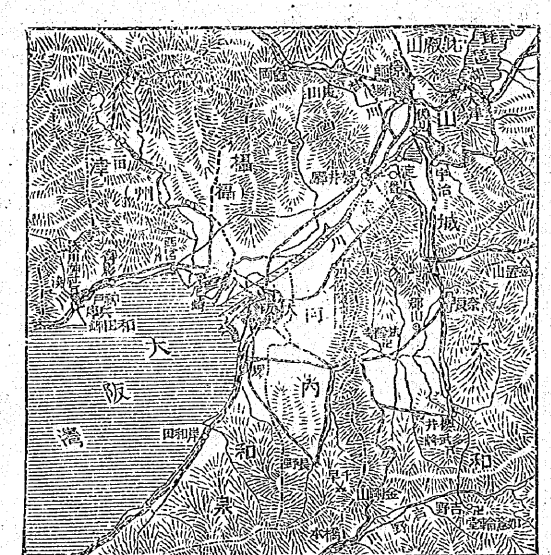
なう候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引き出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易きほどの御事でこそ候はんずらめ。これをおの〳〵聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。（平家物語）

周章

五、最後の參内

さても、今年兩度の合戰に、京勢むげにうちまけて、畿内多く敵の爲に犯し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げゝれば、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は、末々の源氏、國々の催し勢などを向けては協ふべしとも覺えずとて、

催し勢



執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。京勢雲霞の如く、淀・八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族うち連れて、十一月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て

宸襟

有待の身

申しけるは、父正成尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひさだめ候ひけるかに依つて、つひに攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。其の時、正行十一歳にまかりなり候ひしを、合戰の場へは伴はで、河内へ歸し、「死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に卽けまゐらせよ。」と申し置きて死にて候。然るに、正行・正時、すでに壯年に及び候ひぬ。この度、われと手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言に違ひ、且は武略のいふ甲斐なき誘に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に犯され、早世仕る事候ひなば、只

雌雄を決す

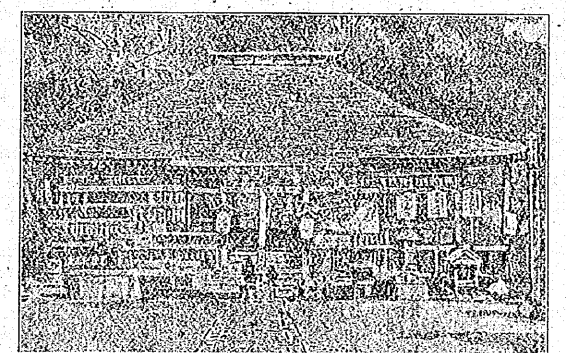
龍顏

玉顏

君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度、師直・師泰にかけあはせ、身命を盡し合戰仕りて、彼らが頭を正行が手にかけて取り候か、正行・正時が首を彼らに取られ候か、其の二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度、君の龍顏を拜し奉らんために參內仕りて候ふ。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏いまだ奏せざるさきに、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上、乃ち南殿の御簾をたかく捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照覽ありて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累

代の武功返すがへすも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は勇士の心とするところ、進むべきを知りて進むは時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせんが爲なり。朕、汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。



如意輪堂

股肱

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

と、一首の歌を書き留め、逆修のためとおぼしくて、各鬢髮を切つて佛殿に投げ入れ、その日、吉野を打ち出でゝ、敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

過去帳

逆修

六、四條畷

中村秋香

秋篠や外山おろしの末氷る
正月五日の朝まだき、
飯盛・尾崎の野に山に
みち溢れたる稻麻の兵、
陽には備へて鳥翼を張り、
陰には潛みて魚鱗を疊み、
寄手おそしと待ちかけぬ。

春の日數もまだ淺みどり、
立ちもかくさぬ霞を分けて、

寄手

先陣・後陣のふた手に分れ、
必死をきはめし三千騎、
潮を捲きておしよする、
白旗一揆を一まくり、
嵐の花とかけちらし、
雲霞の如き敵軍めがけて、
たゞちにすゝむ菊水の旗。

旌旗東西に入りまじり、
汗馬南北に馳せちがひ、
追ひつ、かへしつ、開きつ、卷きつ、

鎬をけづる

電光石火

獅子奮迅

彼方は變じて蟠龍を結べば、
此方は化して逸虎とわかれ、
鎬をけづる三十餘合。

過去帳連署の三百餘騎、
電光・石火と薙ぎたつる
獅子奮迅の太刀風に、
爭ひかねし北あらし、
一陣破れ、二陣潰え、
三陣・四陣もまた頽れ、
大浪かへして亂れちる。

めざすかたきに近づきぬ、
すは、年來の本懷も
今こそ遂げめと、見るが中に、
あはれ、こはそも何なれや、
花とまがひて散りかゝる
梢の雲のたゆたひに、
望も絶ゆる道しばの
露とはかなく消えにけり。
春風ぬるき四條畷、

むかしを問へば、秋篠や
外山の峰は霞めども、
やしろの梅はかをれども。（不盡廼舍遺稿）

七、妹辰子を祭る文

落合直文

隙行く駒の足はやみ、今年もはや十二月四日になりぬ。汝のうせにし日は、まことに去年の今日なりけり。こゝに、うからやから打ち集ひて靈祭す。あはれともきこしめせ。かの去るものは日々に疎しとは、誰がいひそめたる言の葉ならん。われらが心には、更にまことゝも思はず、たゞに思はざるのみならず、いよ〳〵悲しさのみまさりきぬ。上野の山の花も

隙行く駒

仇

見ぬ、隅田川原の月も眺めぬ。汝のこの世におはすればこそ心も慰め、その花その月もわが爲には仇なるのみ。春來ても春とも思はず、秋來ても常に露けきわが身には、秋とも思はざるなり。いかにいはんもかへらぬ事なれど、いかなれば此の兄をすて、いかなれば父母をすて、またはらからをすて、獨のみ世をそむきたりしぞ。物いへば悲しくのみなりぬ、物思へば涙のみこぼれぬ。物いはであらん、思はであらん。さはいへ、いはでかなはぬことあり、思はでかなはぬことあり。そは汝のうせにしあとの事どもなり、この一年が程の事どもなりぞ。をつぎ〳〵に述べて、いさゝか汝の靈を慰めん。

まづ告げまゐらせたきは、汝の臨終の際にいひ遺しゝ事

どもなり。かの櫻の軸物は父上へとゞけまつりぬ。かの羽織は母上へとゞけまつりぬ。かの琴と指環とは姉上へとゞけまつりぬ。かの油繪は兄上へとゞけまつりぬ。かの書どもは他の兄弟どもへわかち與へぬ。己は汝のいひしにまかせて、汝の最も愛でたりし、かの源氏物語を受けぬ。又、乳母にはかの小袖をとらせぬ。心安くおぼしてよ。

次に告げまゐらせたきは、汝の養家の事どもなり。汝の失せし當時は、ふた親とも、朝夕泣き悲しみてのみ居たまひしかば、御病も起らんと案じわたりしに、このほどはまめ〳〵しくなり給ひぬ。かつ汝の此の世におはせし如く、何事もかはる事なく、われら兄弟も日々ゆき通ひて、後の事どもまで

まめ〳〵し

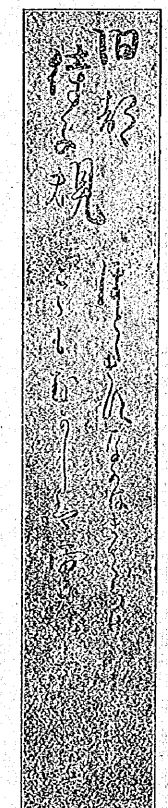
語らひ居れば、こも心安くおぼしてよ。

次には、故郷の事どもなり。父上はかはらせ給ふこと無し。母上は久しう眼の病にかゝらせ給ひしが、このほどはいとようならせ給ひたりとか。今日の靈祭には上り來まさんとのことなりしかば、昨夜までも、今朝までも、待ちたてまつりしかど、今に見え給はぬは、出立の日や延び給ひしならん。いとくちをしけれど、この祭の場にて泣き悲しみ給はんさまを見まつらんよりは、なか〳〵ならん。

次に涙をふるひて告げまゐらすべきことこそあれ。こは乳母の事なり。汝のうせにし日より、病の床に就きしが、此の春ばかり、遂に身まかりぬ。悲しみの中の悲しみなりけり。か

の佛の後世といふものあらんには、はや汝がもとに行きて、かのまめなる心もて、かのよろこばしげなる顔もて、かのやさしき聲もて、朝夕仕へてあるらん。いかに。

次によろこびて告げまゐらせたきことあり。そは、汝の姉



落合直文筆蹟

とも頼み、妹とも思ひ居たりし園子の君なり。今年の秋ばかり、遊學にとて佛國へものせられたり。出立の日は、横濱まで見送りぬ。互にうちしをれてたち別れぬ。園子の君の打ちしをれたるは、別を惜しみてなり。己のうちしをれたるは、別を惜しみしにはあらざるなり。彼の地に著き給ひてよりも、たび〳〵消息あり。其の消息を見るたびに、汝もこの世にあらばと思はぬことなし。そはとまれかくまれ、身のつゝみもなくて、學の道にいそしみ給ふよし。嬉しとおぼしてよ。

次にいはまほしきは、己が心なり。この心をいはんとすれど、いはん言葉を知らず、告げんとすれど、告げん言葉を知らず。汝も忘れざらん、我も忘れず。去年の秋我汝をゐて上野山にものしたりしに、汝のよみてわれに見せたる歌、

諸共にきゝてし居れば上野山
　夕の鐘もたのしかりけり

其の折は、我もしか思へり。されど、その鐘を汝におくれて、か

くひとりのみきかんとは思はざりしぞかし。あはれ、物いへば悲しくなりぬ、物思へば涙のみこぼれぬ。いはであらん、ただ忘れてあらん。（萩之家遺稿）

八、哀傷

稅所敦子

年頃頼みし人の、去年の二月初つ方より、いさゝか心地なやましうて臥し給へるが、世の常のしはぶきのやうにはあらざりけれど、かぎりのたびとやは思ひかけたりし。その程の事かきつゞけむは、いと胸痛うしのびがたければ、くはしうもしるさでなむ。まいて、今はと見はてつる程の心地、なにかはたぐふべき。同じ道にと思ひ歎けど、心にかなふわざにしもあらねば、やう〳〵をさめなむとするに、髪ばかりをそぎて添へきこゆるも、いとあかずあざましうて、

しはぶき

黑髪に憂身をかふるものならば
後の世までもおくれざらまし

神佛にも、今一度おこたらせ給へと祈りたてまつりしも、そのかひなくなりぬれど、後の世は捨てさせ給はじと、なほたのみ奉りて、

おこたる

かぎりある命を今はいかにせむ
みちびきたまへ後の世のやみ

心のやみにくれまどひて、よるひるのさかひも知らねど、一七日ばかりにもなりぬるに、かういとさびしき所に、女ば

かりは、いかでか身はたへてあらむ。ながめなど降る折は、鳴川の水あふれ出でゝ、いとあやふげなるに」とて錦小路の御館にうつるべきよしの給はせたり。いとかたじけなき物から、年頃ともにおきふしなれて、名殘おほかる心地するを、せめて後のわざをだに、こゝにてせまほしう思ひつゝも、なくなく物などとうしたゝむるも、手よりおつるやうなれど、またゆづりきこゆべき人もなきに、反古やうのものゝ落ち散らむもうしろめたければ、よそめにはさかしだち心つよげにも見えぬらむかし。つねによりゐしまきの柱の、いつよりもうちまもられて、紫の物語なるとはやうかはりたれど、

後のわざ

いつかまた袖うちふれむ面影の

たちもはなれぬまきの柱に

今はとて立ちいづるにも、いといみじう、粟田山は昔の宿近かりしところとて、朝夕ながめられつるを、今はよそにだに見ざらむが、あはれに心ぼそかりぬべきなど思ふに、いとどかへりみのみせられて、

浮雲のあはたの山をよそに見て

たゞよひゆかむ果をこそ思へ

こゝも、いとせまうはあらず、人近くたのもしげなるにつけても、あはれありし世ながらうつりきて住みたらましかばと、いとゞかきくらされていみじきに、夜中ばかりにやあらむ、時鳥のほのかに鳴きたるを、

市中にいでゝ鳴くなる時鳥
同じたぐひもある世なりけり（心づくし）

九、夫を亡へる遠國の友へ

小萩がもとの蟲の音も漸く枯れ増りて大方の事だに悲しきころほひ殊に承はり候へば眺めさせ給ふらん君が心のうち推し奉りひしに其の少し御心強く思しなりすめど唯は却りて中々にや却つて歎かるらんされど末の露本の雫後れ先立つ世の常と思ひとおぼし召し候ふとも甲斐なき事かはりて歎かしき後見せ給へ御性分に中なきに立ち君の為にも候はん事業をも守り幼き殿原を育てて幼き君の成人し給ふ後を楽しみに御家の門を興させ給ふるはのこされ給ひし結果の事にて何事も苟且ならずにて候はずりてもし生き残りの身の上をや便りあらば御待ち候ふ女の身なれどひとびとなどは今なほも京に出でて立ちあらんでなし懐しや不知小包と申すもの参りに来りて候ふが是非とも御納めいたしまゐらせ候ところなかなかうちつけながら先づは御見舞申しあげまゐらせ候

十月五日

同 返事

承れば御身ひとりの秋も嘆かれ侍る此の頃御身の御身の事を嬉しく思ひまゐらせ候ひしに候ふはなほやあるらんは思ひ出でましてはなほさらに遠ざかる身の上も悲しく……

我が命榮つて代りゆくぞ[illegible]

[illegible]

[illegible]

十月十七日

一〇、世界の歌枕　その一

上田　敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大きくゆるく打つ。大西洋のはいつも天氣が惡い爲か、稍小く鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は澄んだ藍では無くて、稍黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度稍高くなるに隨つて、浪の色が淡く、入日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であ

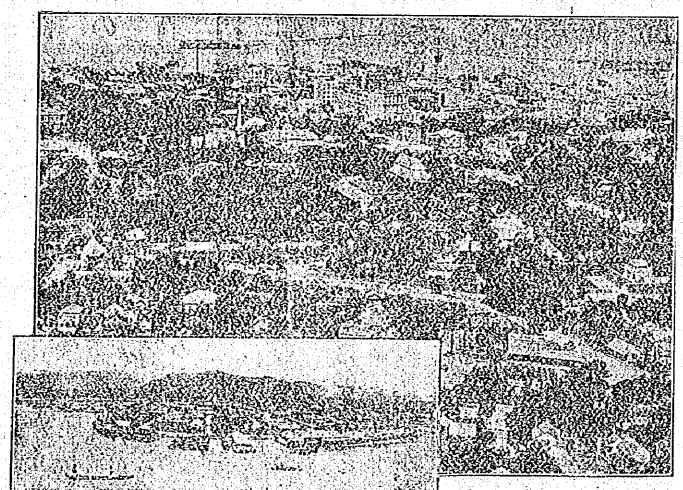
つた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味ふ事が出來た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて五日ばかり後の一日、暴風雨に類した天氣に出遭つて、ひどく苦しめられた。要するに、海の景色は取り出でゝ人に語るほどの事は難いが、後日に追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕である。

單調、究竟歌枕

陸上の景色は、土地に由つて著しい相違がある。一般には言ひ盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱せらるゝ地に行くと、滿目の風光一變して、初めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ蒲黃の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕

背景

蔚然



布哇

樹の下枝に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が花の樣であつたのを記憶する。又桑港の港近くなつた海上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から遙に眺むれば、金門灣頭の大浪が港口に押し寄せる有樣は、水の屏風を立て廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。これはた歌枕に逸す可からざるものと思ふ。

熱帶地方は言ふ迄も無いが、歐米の風光は、日本に比していたく趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも草木が尠い。見る山も見る山も、日本のやうには松杉が山全體を被うてゐない。或は芝山の如く、或は只岩石のみのやうな山の所々に、たま〳〵青々した樹木が十數本繁つてゐるといふ

風の景色が多い。それで日本人は動もすれば、我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、兩方共にそれ〴〵の美しさがある。併しながら、その土地の極めて磽确であるのは、勿論景色が好いとは云はれない。私の通過した米國の一部分は殊に冬枯の候であつたから、人げのない物さびしい廣漠の野を行く心地がした。

概して、あちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離るゝ數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

一一、世界の歌枕 その二

さて、亞米利加の歌枕一二を擧げれば。ワイオミングの平原であらう。眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名に負ふソルトレークの鹽の湖を中斷するルウシンの長路を通ると、平原の間に丘陵の起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、これ亦歌枕の價値あるものといはねばならぬ。又コロラドの北、所謂キャニォンの一部は、奇岩大石路傍に轉じて、さながらの鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸す可からざるものである。

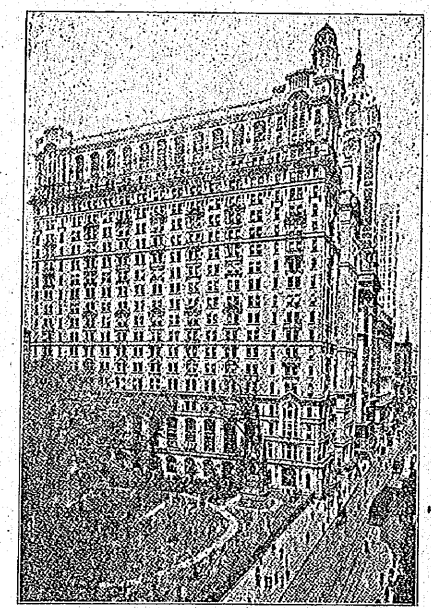
起伏

鬼工

紅塵萬丈

徹底

さて、此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。卽ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の立ち昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば、紐育の摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居る物がある。ブルウクリンの釣橋の上から紐育を望



紐育市街の一部

むと、建て列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階、三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又ホボーケンの港口など、朝霞の景色、夕暮の色、他國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈好箇の歌枕がある。紐育はマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が彈く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂かとも聞える。又はチオルストリートの執務時間に、其の邊を通ると、黄金の爲に萬人の血眼になつて狂ふ樣は、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感を與へる。

慘澹

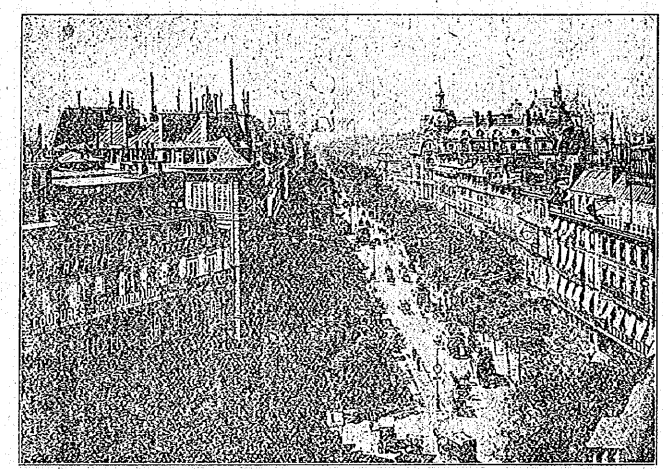
又これとは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉の落ち盡した楓樹の竝木路を、雪を蹴つて小學生徒の走つて行くなど、若き米國萬歳の聲を發したい位である。ニューイングランドの田舍の景色は、落ち着いて若々しい。如何にも懷しい感を與へる。

端麗高雅

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も〳〵賞めるのは巴里であらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致なる、かういふ所に住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。シャンゼリゼーの大通は、實に長安の盛時もものかは、端麗高雅世界第一である。歌枕はどこにもごろ〳〵してある。文明の最高に位するは佛蘭西である、而して巴里である。それでまた

車馬絡繹

隱君子



巴里市街

極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河の邊りに、悠然綸を垂れる隱君子もある。橋の下には犬の髮結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他ノートルダム寺の建築はゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムのすべての變化を味はうと、一日一晩の間眺望した事もあつた。その最も美觀を極めるのは夕方の景色で、恰も黃金の光の波を浴びたやうである。また夜のしら〳〵とあけて、朝風の心地よく頰を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた樣な色から、薔薇色のはでやかなのに至る迄の色合の微かな影を味ふ事が出來る。其の外花を賣る老媼の風、シアルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ペルシロンといふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてた後に、雨が降つて幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り馬車は軋る不夜城の壯觀、滿目の時勢粧、皆歌枕な

不夜城時勢粧

らぬは無き趣である。

倫敦は景色の地として、餘り人は賞めないが、色彩の變化、其の色合の豐な點は、ターナーの繪にある通りで、風俗美は尠いが、光線の變化ばかりは味ふ値がある。併し同じく風光を味ふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。たゞ倫敦にもテームス上流のリッチモンド邊からの兩岸の風景には、英國特有の美觀が現れて居る。此の他風車、朱い屋根、淸き淀に名ある和蘭もよく、伊太利ではナポリ邊の夢のやうな景色もよい。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。要するに、

風光明媚

何處が一番風光は絶佳であるかといふ問題は、一概にはきめ難い。見る人々の心によつて、天下到る處、如何なる地如何なる所と雖も、皆相當の美は味はれるものである。浪のはげしい英海峽の船の上でも、暑さ堪へ難い紅海の甲板でも、見る心によつてそれ〴〵の美しさが感ぜられる。元來歌枕などゝ取り出でゝきめるのは、或は間違つてゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。私の旅行は、學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帶びたのでも無い。たゞ漫然と飄遊したので、感覺を通して印象を捉へたゞけである。（心の花）

飄遊

一二、月の洞庭湖

佐々木信綱

金碧燦爛

浩々蕩々

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甎瓦は幾百年の風霜に黑ずんでゐる。建て直してまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。この色彩の配合が極めて美觀である。

船を捨てゝ上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。それは蘆のまろ家とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その間を通りぬけて、高い石段をあがり、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで、三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り、世は遷つても、天然の景には變遷はない。唯見る、浩々蕩々、洞庭

湖心

湖は目の前に天地の大幅をひろげて居る。彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左にある。いづれも江の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子・狛犬の如くである。其の眞中に今や夕日は落ちようとしてゐる。天地の大觀に見とれて、覺えず吾を忘れて居たが、やがて促し立てられて船へ還つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月は昇る。洞庭八百里、月照岳陽城。といふ詩の通りである。日を數ふれば十二月三日、恰も舊曆十月十五日の夜であつた。望月の夜、月の名所たる洞庭を過ぎ

るとは、何といふ好因緣であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫し難い麗しさである。その中を、遙に一帆又一帆、風のまに〳〵、遠く、近く、且顯はれ、且消える。言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら湖の底深く沈んだならばと思はれる。

美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈澄み上る。見えるものは唯黃金・白銀の波。皓月千里、浮光躍「金。」といふ有樣である。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける、月は愈澄む。此の意人の識るなし、いひしらぬ樂しさ寂しさ、何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身そゞろに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。

一昨年の初秋、富士に登つて絕頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれで、風月の緣に富むことを天に謝したことであつた。

一三、俚諺十則

一、大海の一滴、九牛の一毛。

二、論語讀みの論語知らず。陰陽師身の上知らず。

三、能ある鷹は爪をかくす。

四、多勢に無勢。雉と鷹。

五、今日は人の上、明日は我が身の上。
六、七度たづねて人を疑へ。
七、蛙のつらに水。
八、主と病には勝たれず。
九、寢耳に水、足もとから鳥。
十、詞多きは品少し。

一四、四季の歌

霞たつ春の山邊は遠けれど、　在原元方
吹き來る風は花の香ぞする。

櫻狩

櫻狩雨はふり來ぬ、同じくは　讀人不知
濡るとも花の蔭に隱れむ。

風ふけば波のあや織る池水に、　源雅兼
絲ひきそふる岸のあをやぎ。

夏の夜のふすかとすれば、郭公　紀貫之
なく一聲にあくるしのゝめ。

うちしめり菖蒲ぞかをる、時鳥　藤原良經

鳴くや、さつきの雨の夕ぐれ。

源俊頼

風ふけば蓮の浮葉に玉越えて、
涼しくなりぬ、日ぐらしの聲。

藤原公經

露すがる庭の玉笹うちなびき、
一むらすぎぬ、ゆふだちの雲。

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、
風の音にぞおどろかれぬる。

讀人不知

みどりなる一つ草とぞ春は見し、
秋はいろ〳〵の花にぞありける。

式子内親王

桐の葉もふみわけ難くなりにけり、
かならず人を待つとなけれど。

阪上是則

あさぼらけ

あさぼらけ有明の月と見るまでに、
よし野の里にふれるしら雪。

大江嘉言

山深みおちて積れるもみぢ葉の
かわける上に、時雨ふるなり。

香川景樹

照る月の影のちり來る心地して、
夜行く袖にたまる雪かな。

一五、四季の變遷

吉田兼好

をりふしの移り變るこそ、物毎にあはれなれ。物のあはれは秋こそまされ。」と、人毎にいふめれど、それもさるものにて、今ひとときは心も浮き立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵氣色立つ程こそあれ、折しも雨風打ち續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事もたちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。

やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく

物のあはれ

氣色立つ

名にこそ負へれ

灌佛祭

六月ばらへ

野分

をさ〳〵

遣水

程、わさ田刈り干すなど、取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。

年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める

御佛名
荷前の使

追儺

二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取り重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。

追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦の夜いたう闇きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらむ、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざは、此の頃都には無きを、あづまの方には尚することにてありしこそあはれなり。しかかくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立て

わたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。

（徒然草）

一六、恩愛の道

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒えびすの恐ろしげなるが、かたへの人にあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人も持たず。」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞ物し給ふらむと、いとおそろし。子ゆゑにこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべきことなり。

恩愛の道ならでは、かゝるものゝ心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだしおほかる人の、よろづに諂ひ、望深きを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。其の人の心になりて思へば、まことに悲しからむ人のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗もしつべきことなり。

されば盗人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。」人窮りてぬすみ、世治らずして凍餒の苦あらば、とがの者絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめてこれを罪なはむ事、不便のわざなり。

さて如何にして人を惠むべきとならば、上の奢りつひやす所をやめ、民を撫で農を勸めば、下に利あらむ事疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひがごとせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。（徒然草）

一七　日野の山奥

鴨　長明

闕伽棚
眉間の光

今、日野山の奥に跡を隱して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を請けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢、並に不動の像をかけたり。北の障子の上に小き棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。す

ほどろ
つかなみ
すびつ

なはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各一帳を立つ。所謂折箏・繼琵琶是なり。東の垣にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。ずなはち諸の藥草を植ゑたり。假の庵の有樣かくのごとし。

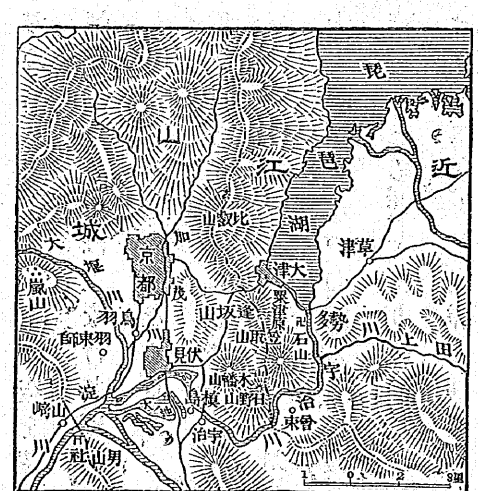
筧
爪木

その處の樣をいはゞ、南に筧あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めぬ。谷しげゝれど、西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして

死出の山路
空蟬の世

西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しぶかと聞ゆ。冬は雪を憐ぶ。つもり消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛懶く、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また、恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて滿沙彌が風情をぬすみ、もし楓の風葉をならす夕べには潯陽の江を思ひやりて源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

口業
滿沙彌
秋風の樂
流泉の曲



また、麓に一つの柴の庵ありぬ。なはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もし徒然なる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或は茅花を拔き、岩梨

田井

勝地

家苞

を採る。また、零餘子を盛り、芹を摘む。或は、すそわの田井に至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。もし、日麗かなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙に故郷の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、志遠くいたる時は、これより峯續き炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間に詣で、石山を拜む。もしは、また、粟津の原を分けて蟬丸の翁があとをとぶらひ、田上川をわたりて猿丸太夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつゝ櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜なれば、窓の月に古人を偲び、猿の聲に袖を濕す。叢の螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲を憐むにつけても、山中の景氣、折につけて盡くることなし。況や、深く思ひ深く知れらむ人の爲には、これにしも限るべからず。

かせぎ

（方丈記）

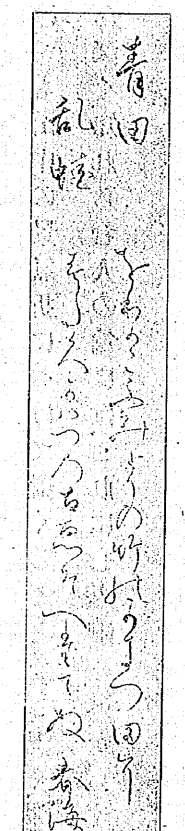
一八、小品三章

一　八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る

村田春海

芳宜園の月のまとゐは年ごろのちぎりなれば、來てふにも似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々詣で來にけり。さるは降りくらしたる雨の名殘、霽れゆかむ空も覺えず。ましてさやけき光待ち出でむはいと心もとなきを、更けゆかば、かくのみにはあらじを、今宵は寢で明してまし。などいひつゝ、伊豫簾空しうかゝげて、空のみ打ち守らるゝもいとわりなしや。今宵は名に負ふ園生の花もいたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみやうく聲そはりゆくも、猶あかぬわ

淺茅がもと



村田春海筆蹟

ざながら、流石にあはれは添へつべし。

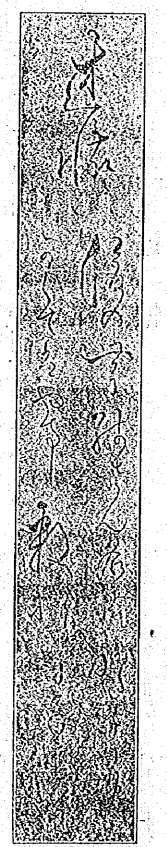
晴間なき月をいかにといひくて
そらながめにや今宵あかさむ

かきくらす雲間のかげはうとくとも
月まつむしよせめて語らへ

二　砧を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみたゆむもまた、しきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらむ、砧



清水濱臣筆蹟

の音の雁がねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そも此の音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。

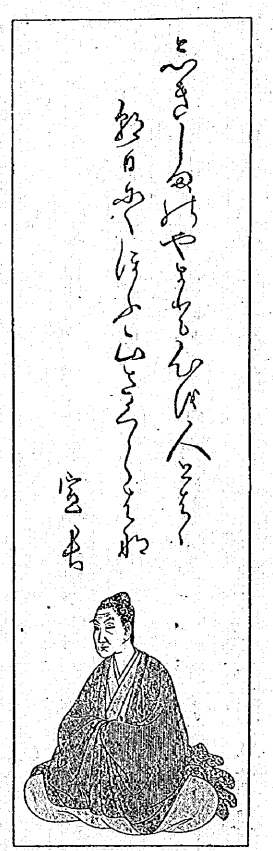
三　述懷

本居宣長

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手を折りて數ふれば、はや三十ぢにも餘りにけり。命長くて七十ぢ八十ぢ生けらむにてだに、早く半ば過ぎぬるよと思へば、まだよどもれるやうなる身も、行先程なき心地のして、心細くぞ覺ゆる。かくのみはかなく心なき草木鳥獸の同じつらに、何ずとしもなく明し暮しつゝ、生けるかぎりの世を盡し

言ひがひなし

て、徒に苔の下に朽ち果てなむは、いと口惜しく、言ひがひなかるべき事と思ふにも、萬にいたり少く、拙き身にしあれば、何事をし出でゝかは世の人にも數まへられ、亡からむ後の



本居宣長筆蹟

えうなきもの

世に、朽ちせぬ名をだに留めましと、いとゞ人に似ぬ愚かさへ取り添へてぞ、悲しく心憂かりける。さりとて、はた身をえうなきものにはふらかしはつべきにしもあらず。かくの

み拙き愚かなる心ながら、何業にまれ怠なく、わざと心に入れて勉めたらむには、終には一つ故づきて、なのめにし出づる節もなどかはなからむと、あいな頼みにかゝりてなむ。

（鈴屋集）

一九、扇の的

尋常にかざる

さるほどに、阿波・讃岐に、平家にそむきて源氏を待ちけるつはものども、あそこの船、こゝのほちより、十四五騎・二十騎うち連れうち連れ馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く所に、沖より尋常にかざつたる小舟一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八たんばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女ばらの、柳の五つぎぬにくれなゐの袴着たるが、皆くれなゐの扇の日出いたるを舟のせがいに挾み立て、陸に向ひてぞ招きける。

五つぎぬ

舟のせがい

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、「射よとにこそ候ふらめ。たゞし大將軍の矢おもてにすゝんでけいせいを御覽ぜられん所を、てだれにねらうて射落せとのはかりごとゝこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官、「みかたに射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「てだれども多う候ふなかに、下野

けいせい

てだれ

小兵

もよぎ縅

鏑

重籐の弓

の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。」と申す。判官、「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官、「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一其のころは、いまだ二十ばかりの男なり。褐にあかぢの錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、もよぎ縅の鎧着て、あしゞろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇にはさみ、甲をば脱いで高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。判官、「いかに、與一。あの扇のまん中射て、かたきに見物せさせよかし。」と宣へば、

一定

仔細の存ず

御諚

金覆輪

與一、つかまりつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長きみかたの御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國にむかはんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これよりとう〳〵鎌倉へかへらるべし。」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はゞ外れんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて御前をまかり立ち、黑き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汗べむいてぞ歩ませける。みかたのつは

矢ごろ

くしに定まらず

くつばみ

はれならずといふことなし

ものども、與一が後をはるかに見おくつて、「此の若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入つたりけれども、なほ扇のあはひは七たんばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は、二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風はげしう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりすゑて漂へば、扇もくしに定らずひらめいたり。沖には平家船を一めんに並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べて之を見る。いづれもいづれもはれならずといふことなし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇のまん中射させたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國へかへさんとおぼし召さば、此の矢外させ給ふなと、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鏑を取つてつがひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦ひゞく程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいうつとぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆くれなゐの扇の日出いたるが、夕日のかゞやくに、白波の上

よつぴいてひやうと放つ

一もみ二もみ

に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。くがには源氏箙をたゝいてどよめきけり。（平家物語）

どよめく

二〇、芳流閣上の奮鬪

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ纆の如し。」と。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將た禍の伏す所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかばはるゞ〳〵滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかり

禍福は糾ふ纆の如し　人間萬事塞翁が馬

し、その福は禍とふり變りたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をゝに釋くよしもなく、縡急にして意外にあり。僅に當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる、心の中はいかなりけん、想ひやるだにいと痛ましされば、又、犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、懋に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き彼の樓閣は三層

捕手

なり。その二層なる檐の上迄身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく、波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繋ぎとめんと、腿の樹傳ふごとくさら〳〵と登りはてたる三層の屋根には目柴翳すよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへあう

滔々

瀧澤馬琴

て立つたるありさま、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。

浮圖

廣庭には成氏朝臣、横堀史・在村等の老黨・若黨圍繞せし床几に尻を打ち掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦、只、閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗・長刀を晃かし、或は箭を負ひ弓杖つき立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて、項を反らしてこれを觀る。加之、外のかたは綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ、信乃、武事長け膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼、鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶

墨氏が飛鳶
魯般が雲梯

ゆれば、綽みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時、信乃思ふやう、初層・二層の屋の上まで追ひ登らんとせし兵等を斫り落しつる後は、絶えて近づく者もなきに、今たゞひとり登りきぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又、富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫、一箇の敵なり。ひつ組んで刺し違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそごさんなれ、目に物見せんと血刀を袴の稜もて推し拭ひ、高瀬の如き方桙に立つたるまゝに、寄するをまてば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝・勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとても、搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの

遮莫

高瀬

萬夫不當

擬議

嵩

役義に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも擊たるゝとも、勝負を一時に決せんものをと思ひにければ、ちつとも擬議せず、御諚ざふと呼び掛けて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桙の左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に擊つをはつしと受け留めて、拂へば透かさず突つこむ刀尖をさゝへて流す一上一下、辷る甍を蹈みとめて、しきりに進む捕手の祕術、かなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々。未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて、見るめもいとどはるかなり。

鋒然
沛然

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑むとき、鋒然として風起り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖肱當の端を裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を揣りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受け流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みて

覆車の米苞

はたと打つ、十手を丁と受けとむる、信乃が刃は鍔際より折れて、遙に飛びうせつ。見八得たりとむぐと組むを、そがまゝ左手に引き着けて、かたみに利腕しかととり、捩ぢ倒さんとえいごゑ合して、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈みこらして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削りなしたる甍の勢、とゞまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へうちかさなりつつどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきりて、射る矢の如き早河の直中へ吐き出さ

れつ。しかも、追風と退く潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

二一、春日の局 その一

福地櫻痴

こゝは城内御白書院にして、今日將軍家御息女和姫君御入内門出の御祝儀行はれ、春日局は御母代となりて二位に叙せられ、姫君に侍して諸大名の拜禮を受けぬ。終りて土井・松平・本多・青山等の重臣のみ座に殘れり。此の時、御小姓組番頭稲葉丹後守、熨斗目上下にて出で來り、春日にむかひ、

丹「唯今、國許より父上の御使として、七之丞・内記の兩人御手紙を持參致し、罷り越してござります。」

春「むゝ、さうでござるか。これへ召し連れて參られい。」

丹後守兩人を伴ひ來る。兩人下座につき、

七「母上樣、御機嫌よろしう。」

内「おめでたうございます。」

春「二人とも無事で、ようお來やつたのう。」

七「父上樣の御手紙を持つて、御使に參りましてござります。」

春「それは御使大儀であつた。久しぶりで逢うたが、大層成人しやつたのう。父上樣にも御變りなく御機嫌よろしいか。」

七「益、御機嫌よくいらせられます。」

春「父上の御書狀はこれへ持參いたしたか。」

七「はい、持參いたしてございます。」

七之丞、懷中の守袋の其の内より文取り出し、膝すり寄せて渡せば、局

會釋

は押し戴き、左右に會釋し、封切つて讀む文體に、はつたと驚き、繰り返して讀み直し、讀み直しては太息を吐き、暫し無言にて居たりしが、仔細は何か知らねども、左右の眼にうかみたる涙は落ちてはら〳〵はら、悚へ悚へし悲の悚へかねてや、今はたとわつとばかりに泣き伏せば、

仔細

丹「母上には、如何なされて御座ります。」

土「男勝りの御局がその悲は只事ならず。」

松「仔細は如何に、春日どの。」

春「いや、御心配下されますな。おもひがけない悲に、つい心を亂し、はしたない體御覽に入れて面目なし。御免下さりませ。」

又もや涙にくれたりしが、何思ひけん眼を拭ひ、身を繕ひて丹後にむかひ、

春「ちと御老職がたへ申し上げたき事あれば、丹後、そなたは二人の弟を連れて退座しや。」

丹「はつ、畏りました。」

三人退座す。局は土井にむかひ、

春「大炊殿、只今俄に斯樣の儀を申し出さば、心狂ひしかと御訝りもご

春日の局並筆蹟

ざらうが、さりがたき仔細ござりますれば、何卒直樣此の身の御暇賜りたく、この儀兩上樣御臺所へ御前樣より御申し立ての程願ひまする。」

土「常々より物に騷がぬ御局が只今の嘆といひ、直にお暇を賜りたしとの御願は、何さま仔細のある事でござらう。大炊隨分御取次も致しませうが、其の仔細苦しからずば御咄し下されい。某ども一同、これにて承るでござらう。」

春「御深切のお詞、ありがたう存じまする。今は何を包みませう。此の春日は夫佐渡より離緣を受けましてござりまする。」

本「なに、佐渡殿が御局を離緣致されたとな。」

御母代了簡。

青「それは容易ならざること。」

土「又、佐渡殿にも似合はざる短慮の計ひ、罪科もなき妻女をば離緣致すとは餘りの事でござる。」

春「此の上は只身の御暇下し給はるやう、偏にお取次を願ひまする。」

土「さほどまでに願はるゝもの、御取次は致しませうが、御局には、恐れ多くも從二位に敍せられ、御母代にならせたを打ち棄てゝ御暇を願はるゝは、ちと御了簡が違ひは致しませぬか。」

いはれて局は胸迫り、又もやせき來る涙を拭ひ、

春「春日が了簡、少しも違ひは致しませぬ。凡そ人の妻たる者

大御所樣

が、其の夫に見限られ、捨てらるゝ程の恥辱はまたと御座りますまい。先頃のこと、大御所樣より、「夫佐渡召し抱へらるべき間、江戸表へ罷り越す樣内々申し遣せ。」との世に有り難き御上意に、飛び立つ程の嬉しさに、急ぎその旨細々と文に認め遣しまして御座りまするが、女の恩にて立身致すは武士の恥と、二人の子供が持參せし此の文に。」

離別を受けし悲しさは、

奉「沖に漂ふ捨小舟、雲井の上に昇るなる、二位の位は高くとも、夫に離るゝ雁がねの、獨り行きては何かせん。五つの衣の綾錦、唐紅の袴着て、玉の臺に住まふより。」

今は春日の霞さへ、秋の野分に散る落葉。

奉「只此の上はお暇たまはつて、元の姿に立ち返り、春の朝は疾く起きて、粟田の山に薪伐り。」

秋の夕は小夜ふけて、山科の里に絲を繰り、

春「夫婦親子睦まじう暮しまするが、春日の望、御推量下されて、土井殿、何れも方、お執り成しを偏にお願ひ申し上げまする。」

男まさりの御局も、夫を慕ふ貞節に、女となりてかきくどく心の程ぞ美しき。

二二、春日の局　その二

かゝる所に、上段の御簾の内に聲あつて、

將「やよ春日。」

聞いて局は打ち驚き、姿繕ふ折柄に、御簾をさつと捲き上げさせ、二代の將軍秀忠公、御臺若君姫君も威儀を正して坐したまへば、皆一同に平伏す。局は涙を押し拭ひ、

春「はしたない體御目に留り、恐れ入つて御座ります。」

將「常に替りし嘆の體は、夫佐渡に離縁されたる故であるよな。」

春「御直に申し上ぐるは恐れ多くございますれば、願の趣大炊其の外より申し上ぐるで御座りませう。」

將「大炊、その仔細申せ。」

土「はつ、既に御聽に達せし上は、包み隱すに及ばず。御意の通り、春日におきましては、女の身として夫に離別を受けまするは一世の恥辱、若君樣の御守役も、姫君樣の御母代も相勤らずと存じ、何とぞ直樣御暇を願ひ、元の身となつて夫佐渡に詫言致したき所存に御座りますれば、御暇の願執次に致します樣に、たつて申し迫り居りまする。」

將「むう、それでは、春日には佐渡より離別の書狀が參つたと申すか。春日、差支なくばその書狀われらに見せい。」

春「上意には御座りますれど、恐れ多い次第に御座りますれば。」

將「いや、遠慮には及ばぬ。これへ出せい。」

春「はつ。」

將「右衞門、その書狀讀み上げい。」

松「畏りました。」

右衛門大夫は、狀おし披き、詞よどまず讀み上げたり。將軍篤と聞かせられ。

將「成程、其の書狀の樣子では、佐渡が、女房の緣をもつて立身いたすは恥辱なりと存じて離別いたすと申したるも武士の意地。また春日が、すぐに暇を願うて立ち歸り、佐渡に詫言して元の身分になりたいと申すは賢女の操。のう、御臺所、左樣ではないか。」

御臺所「仰の通りに御座ります。春日が心中察し入りまして、先程より涙に袖を濡しまして御座ります。」

將「さうであらう。如何なる憂目に會ふとも更にひるまぬあの春日が、左右の眼を泣き腫らし、嘆に沈みて取り亂したるは、これ貞婦の誠。女たるものは、斯くなくては相成らぬ。姫君にもよく御心得なされよ。春日がさう思ひ入つたる上は、止めても止るまい。すぐにこれより歸國致すがよい。都合次第、何時でも出立致せ。これまでの忠節一方ならず、秀忠滿足に思ふぞ。」

春「御懇の上意、有り難う存じ奉りまする。自儘の儀を願ひ、御咎をもあるべきに、身の御暇下し置かれ、御恩の程御禮申し上げまする。此の上は、若君樣へ御別を惜み奉り、後々の事ども、梅の戸へ申し殘し、出立仕りたく存じまする。」

將「暇の願聞き濟んだる上は、萬事心まかせに致せい。」

奉「さ樣ならば、上意に從ひ御免を蒙り、退座仕りまする。」

馴れし御殿も今日限り、後へも心ひかされて、流石の局もしを〳〵と御前を出でゝ行くところを、上にはきつと諾かせ、

將「これや春日、暫く待て。」

奉「はつ、御用にござりまするか。」

將「別に用といふではないが、一寸其の方に引きあはせたい大名がある。上野、かの者を召し連れい。」

本「畏つて御座りまする。」

本多は仰を蒙つてお次に入りしが、ほどもなく伴ひ出づる其の人は、無地の熨斗目に長上下、行儀を正して伺候なし、末座に控へて平伏す。

熨斗目

將「遠慮に及ばぬ。近う、近う。」

稻「はつ。」

土「上意で御座る、お進みなされい。」

稻「はつ。」

將「春日、その大名を存じて居るか。」

局は上意に顏を上げ、

奉「や、や、あなたは我が夫。」

將「これなるは大御所の御目鏡にて、此の度眞岡二萬石を與へて召し抱へたる稻葉佐渡守正成と申す大名ぢや。何と立派なよい大名であらうがな。」

聞いて局は飛び立つ嬉しさ、

奉「えゝ、有り難う御座りまする。」

稻「春日にも御母代を仰せ蒙り、二位に叙せられ、恐悅な事で

ござる。」

將「おゝ、春日、嬉しいか。いや嬉しさうな顔付ぢや。」

と御臺所に向はせて、

將「御覽なされ、只今までの泣き顔に打つてかはり、春日のあの嬉しさうな笑ひ顔、さりとは餘りの違ひではござらぬか。しかし、こりやさうなうては相成るまい。夫が離別の書狀を見て嘆に沈み、正體なき泣顔を見せたるも卽ち賢女、今また夫が立身の體を見て、嬉し涙の笑顔をば繕はぬも賢女。誠に春日局は賢女の龜鑑。秀忠感心いたすぞ。これでは、暇を取つて山科に歸るにも及ぶまいがの。」

春「有り難い御上意、恐れ入つて御座りまする。」（春日の局）

二三、婦人の天職

下田歌子

婦人は何の爲に此の世に在り、何を以て此の世に盡すべきものでありませうか。此の婦人の天職は何であるかと云ふ事を知るのは、大切なる婦人の覺悟であらうと存じます。之を知らなければ、婦人として世に立つて行く方針が分りませぬ。婦人が種々の學問もし、稽古もして居るのは、要するに此の天職を全くする爲の準備に過ぎませぬ。それであるのに、肝腎の天職を知らない樣では、誠に心細い次第であると云はなければなりますまい。

併し、實際に於て、婦人の天職は何であるかと申して見ま

すれば、之を適當に答へられる人は存外少いやうであります。凡ての婦人が、「我は何故に此の世に生れて來たのか。何事を此の世の爲に盡さなければならぬか。」と云ふ事を明に自覺し、十分に道々の事に從ひいそしむやうになつた時が、卽ち其の國家社會の最も文明に進み、凡ての事が理想的になる時であらうと存じます。併しそれはまだ〳〵遠き未來の事であるやうで御座います。

理想的

婦人の天職と云ふ事については、世に幾樣の解釋があるか知れませぬが、兎に角、世に男子と女子とあつて、其が相互に助け合つて此の世の中が圓滿に進んで行くと云ふからには、男子は男子として、女子は又女子として、夫々の責務がある事は云ふまでもありませぬ。唯其の務を十分に會得しないで、一時目の先許りの事を其日々々に爲して、それで可いと思つて居るやうでは、何時迄も女子と男子とは殆ど人種が違つて居るかの樣に見られて、「女子ども」なる格段の取扱を受けねばならぬでありませう。

それならば、婦人の天職は何處にあるかと云ふ問題になつて參ります。私は之に對して、婦人の天職は到る處にあると答へたいと存じます。遠きわが上古の事は暫く措き、從來の人は、主に婦人の天職は家庭内に限るものと考へて居りましたが、今は最早男子でも、十分婦人の價値を認める樣になりました。決して家庭内の人たるのみで無いといふ事が

解りました。乃ち、婦人は男子と共同して社會を進歩させて行くものであつて、決して男子の力の下に屈伏して、男子の厄介物然として居るものでないと云ふ事を知らなければなりませぬ。

厄介物然

一言にして云へば、婦人の天職は男子と共同して社會の進歩を謀る事であります。共同と云ふ上に大層深い意味があります。社會の進歩發達と云ふ事を目的として、男子と女子と相互に助け合つて、共同一致して事を謀るので御座います。畏けれども、我が日本の國初に在りては、伊弉諾伊弉册の二尊が共同一致遊ばされて國造し給うたのであります。其の如く、決して女子が男子に屈從するでなく、男子が女子を壓服するでなく、此の兩方が其の長所を出し合うて、共に心を合せ手を取り交して、喜の中に、樂の間に、世の中と云ふ立派なものを作り上げるのであります。其處で、婦人の天職は男子の足らない處を補ふと云ふ事になります。男子の天職はといへば、勿論又女子の足らない處を補足扶助する事でありませう。

併し、斯う申しては、まだ判然と致しますまいが、男子を助け男子の足らない處を補ふのが婦人の天職でありとすれば、婦人の天職は決して家庭内に限る譯ではありませぬ。家庭に於ても國家社會に對しても、又は人道と云ふ上に於ても、十分盡すべき天職を持つて居るので御座います。

然るに婦人が自ら屈して、女子は社會や國家や人道に關する必要はない。家庭の中にあつて、子を育て、家を守れば、それでよろしいとのみ思つて居られる樣では、其は自分で自分を侮る者で御座います。勿論、事には本末が御座います。私が斯く申したからとて、家庭の事も何もかも打ち捨てゝ、國家社會の事業に奔走せよと云ふのでは御座いませぬ。先づ婦人たる者は家庭の事に全力を注ぎ、家庭の事が十分に出來た上に、國家社會の事にも餘力を致すと云ふのが順序であります。何故となれば、男子の最も缺けて居る所は家庭の事でありますから。男子は何らしても外に出でゝ世の中の表面の事に當る場合が多いのであります。そこで、勢家庭の事は

圓滑

疎かになり易いから婦人が主としてこれに當ると云ふ樣になるのでありまして、何もこれ許りが婦人の天職であると狹く小く限るには及びますまい。乃ち一般婦人の天職は調和といふ點にあります。婦人は優しく美しい者で、花に比べ蝶に喩へられるものであります。男子の雄々しい力强い烈しい氣象に對して、女子が如何にも淸くゆかしく、剛と柔と互に調和してゆけば、世の中の萬事が都合よく參るものであります。それで家庭と云はず、國家社會といはず、婦人のなすべき事業は此の方面にあります。

男子の事業は荒削りをするのでありますが、婦人は其の事業を美しく飾り、淸く磨き、圓滑に動く樣にする方面に其

の天職があります。譬へて云はゞ、男子は建築家で、婦人は美術家であるとも云はれませう。男子によつて建てられた社會の事を、更に麗しく飾つて行くのが婦人の務であります。斯くして男子と女子とが、各其の天職を全くした時に、初めて立派なる社會が出來るのであらうと存じます。

二四、世界戰爭の顚末

我が大正三年、西暦一千九百十四年、六月、墺洪國政府はボスニア・ヘルツェゴヴィナに於て軍團の演習を行へり。皇太子フランツ・フェルヂナンド大公、老帝に代り之を統監し、事了りてボスニアの首府セラエーヴォに赴く。時は二十八日

猛然

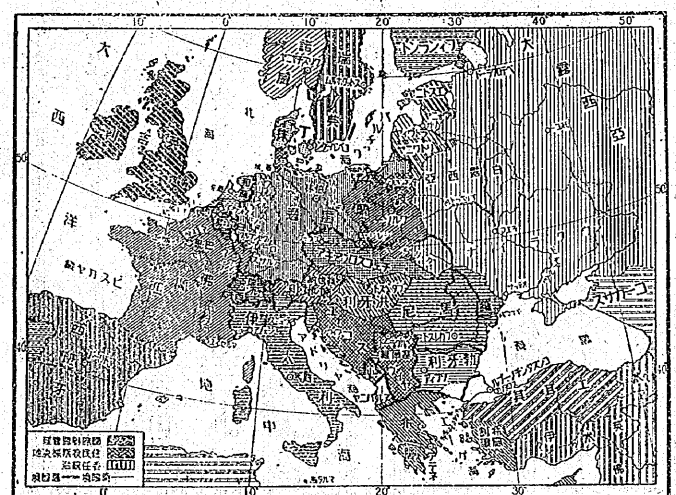
午前九時五十分、市の停車場に着し、妃と自働車に同乘して歡迎會場なる市役所に臨まんとす。時に拜觀の群集中なる一人の青年、突然大公の車中を目がけて黑き小箱を投げ付く。大公は何心なく之を取れる一刹那、猛然爆發して陪從の武官を傷けたり。

歡迎式の事終るや、大公は傷きたる武官を陸軍病院に慰問せんとて、再び車を驅りて出でたるに、又もや一青年あり、車中を目がけてピストルを連發したり。妃は銃聲を聞くと齊しく、急ぎ身を以て大公を掩ひたれど、銃丸皆命中して、あはれ大公も妃も同じ枕に仆れて事きれぬ。

兇行者は前後とも直に捕へられたり。審問するに、事件は

激昂

最後通牒



隣國セルヴィアの秘密集團及び高級武官に關係せり。墺洪國の人心は激昂を極めたり。墺洪國政府は七月二十三日午前六時を以て、セルヴィア政府に最後通牒を發して、犯罪者及び秘密運動に關する處分を要求し、四十八時間内に決答せんことを求めたり。セルヴィア政府は其の要求

撤退

聲明

同盟國

の大部分を承認せしかども、國の獨立を害するが如き事項は斷然拒絶せり。是に於て、墺洪國公使は即時にセルヴィア國の首府ベルグラードを徹退し、二十八日、墺洪國はセルヴィア國に對して宣戰せり。

是より先、墺洪國政府はセルヴィアに與へたる最後通牒の内容を列國に通知せり。墺洪國の同盟國なる獨逸は、これ至當の要求にして他國の干渉すべき者に非ずと聲明せしが、セルヴィアと同人種なる露國は是に反對せしかば、兩國遂に動員を行ひ、八月一日、獨帝は露國に對し宣戰し、翌二日、露帝も亦宣戰を布告したり。是に於て露國の同盟國たる佛國も亦動員を行ひて、翌三日獨逸と敵國たることを表明せ

り。

かくて、獨軍は先づ急に佛國を粉碎して、然る後露國に向はんとせり。然れども、獨佛國境の方面には堅固なる要塞あるを以て、獨逸は道を白耳義に假りて容易に佛國に入らんと欲す。白耳義は小國にして大國の間に介在するを以て、有事の日には其の中立を尊重すべきこと、英獨間にも條約あり。因りて、英國は獨逸に向つて白耳義の中立尊重の保證を要求せしかども、獨逸は之に應ぜざるを以て、八月四日、英國も亦獨逸と交戰狀態に入るを宣言せり。

介在

中立尊重

當時、歐洲に在りては、一方に獨逸・墺洪・伊太利の三國同盟あり、一方に英・佛・露の三國協商あり、相對して國勢の平均を保ちたりき。されば、伊太利は義に於て獨・墺に與すべきなれども、由來墺洪國とは利害相反すること多く、且、今度の戰爭は獨逸が好みて戰を開きし形跡あるを以て、同盟の義務なしとて、遂に中立を宣言せり。これに因りて、交戰諸國の一方は獨・墺の二同盟國を主力とし、一方は英・佛・露の三協商國を主力として、龍虎風雲の爭を現ずることゝなれり。

龍虎風雲の爭

思ふに、墺洪國皇太子不慮の薨去は、實に同情に堪へずと雖も、歐洲列强が一齊に兵を執りて起つに至りしは、相互複雜の原因なくんばあらず。

抑も動亂の點火地となりしボスニア・ヘルツェゴヴィナ二州は元來土耳古の領地なりしが、明治十一年、露土大戰の

結果、墺洪國は漁夫の利を得て、此の二州を無期限預り地として管理統治せり。是、露國の不快とする所にして、セルヴィアは亦民族の關係上此の二州を自己の勢力地と信じたりき。然るに、明治四十一年、墺洪國は獨逸の後援に賴り、協商三國の抗議を顧みずして、二州を本國に合併せり。是、露國、及びセルヴィアが深く憤る所にして、セラエーヴォの變は實にこゝに根ざせり。然れども、國際の利害關係猶これより大なる者あり。

抗議

時の獨逸帝は、卽位以來海軍の擴張に熱心し、海上王の英國と海上に覇を爭はんと欲し、露國は黑海より地中海に發展せん爲に土耳古を手中に收めんことを欲し、獨逸は又鐵道に由りてペルシャ灣に出でんが爲、土耳古を手中に收めんと欲し、佛國は普佛戰爭の舊怨を忘れず、アルサス・ローレーヌ二州を獨逸より奪ひ還さんと欲す。是等の關係錯綜し、虎視耽々互に海陸の軍備を擴張したりしかば、何時かは勃發すべき形勢なりしが、セラエーヴォの一發その導火となりて、俄然として爆發したる者、これ今度の大戰なり。

虎視耽々

さる程に、獨逸軍は國際公法を蹂躙して、八月四日白耳義に進入し、同二十日リエージュ要塞を陷れ、將に長驅して巴里を衝かんとせり。佛軍は不意の攻擊に狼狽しながら、巧に兵力を此の方面に移動したれど、佛軍は七十五萬、獨軍は百萬、佛軍遂に敗れて巴里に近きマルヌ河の線に退却せり。

破竹の勢

九月、英佛軍百十萬、十分なる準備を以て逆擊しければ、獨軍遂に退きて北方約十里なるエーヌ河の線を保つに至り、破竹の勢こゝに一頓挫せり。此の間、露國は東方より進軍して、一部は獨逸の東普魯西に進入し、一部は墺洪のガリシアに進入したるが、東普魯西方面の軍は獨軍に擊退せられぬ。

爰に、吾が日本は東洋の平和を維持せんがため、獨逸に向つて支那の山東省なるその租借地を支那に還附する目的を以て我が國に引き渡すべき旨を勸告せしかども、獨逸は之に應ぜざりき。是に於て我が國は日英同盟の條約に基き、八月二十三日獨逸に宣戰し、支那山東省なる獨逸の青島要塞を攻めて猛烈なる砲擊をなし、十一月七日之を陷れぬ。吾

掃蕩

が國は、又英國海軍と共同して、東洋に横行せる獨逸の軍艦を掃蕩し、及び南洋なる獨領諸島を占領し、列國の東洋通商をして安寧ならしめたり。

砲烟の中に年あけて、大正四年となりぬ。五月、獨軍は二百二十萬の兵を以て、大に露軍と戰ひて波蘭地方を取り、破竹の勢を以て前進すること百三十里に及べり。西方に於ては、伊太利が英佛側に加入せるありと雖も、戰況捗々しからず、動もすれば獨軍に乘ぜらるゝ形勢あり。是獨逸が積年心を軍事に盡し、豫め今日の準備をなしたるに由れり。

惡鬪

然れども、英・佛・露・伊の四强國に圍まれて連年惡鬪せる獨逸は、物資漸く窮乏し、兵士も亦漸く劣弱となれり。大正五年

二月、獨軍必死の力を振ひて佛のヴェルダン要塞を強攻し、爾來數月、五十五萬の兵士と一千五百萬發の砲彈とを費して、遂に志を得ず、こゝに其の疲弊を露さんとせり。

此の年五月、獨逸海軍の主力艦隊は、英國の艦隊と丁抹海上に遭遇し、一大海戰を開始したるが、決戰を避けて自國港灣に歸りぬ。蓋し、獨逸海軍は自ら英國海軍の敵に非ざるを知り、敢て出でゝ戰はざりしなり。

大正六年に至りて、獨逸は益疲弊し、英佛の戰況漸く好望となれり。然るに、三月露國に革命起り、帝室を廢し新政府を建て、是が爲に露國は秩序紊亂して、戰爭不可能となれり。

秩序紊亂

是より先、獨逸は潛航艇を以て敵國其の他の船舶を擊沈せしが、六年一月以後は如何なる船舶に對しても無警告に擊沈せんことを宣言し、これがため米國及び中立國船舶の擊沈せらるゝもの頻々たり。米國は其の人道に悖ることの甚しきを怒り、四月六日遂に獨逸に宣戰せり。而して我が海軍艦隊は地中海に出動して協商國艦隊の作業を助けたり。

無警告

大正七年三月、獨逸は露國と和し、此の方面の兵を西部戰場に送りて、英佛軍と決戰せんとす。かくて、獨軍は一舉に勝敗を決せんとして死物狂の肉彈戰を強行し、七月中旬、進みてマルヌ河を渡りしが、佛軍猛然として攻勢を取り、獨軍遂に退却の止むなきに至りたり。是より先、獨墺軍の露國に捕虜となりたりし者、露國の親獨派と結びて西伯利亞に横行

疲弊の極

暴騰

しければ、吾が國は兵を出して協商國軍の主力となり、之を討ちて東亞の平和を維持せり。

既にして獨墺側の同盟國は疲弊の極に達し、東部なる勃牙利・土耳古の二國先づ聯合軍に屈服しぬ。西部戰場にては、獨軍は退却又退却、協商軍は早くも獨逸の國境に臨めり。是に於て、さしもの獨軍も術計盡きて休戰を乞ひ、協商軍提出の條件を盡く承諾しければ、十一月十一日、遂に兩軍休戰せり。かくの如くにして世界戰爭は前後五年にして初めて收りぬ。兩軍の死者合計約八百萬、傷者三千萬、軍費三千億圓に上る。產業は荒廢し、物價は暴騰し、都市は破壞せられ、名所・舊蹟は蹂躪せられ、飢餓の民、傷癈の兵、父を失へる子、夫を哭する妻、到る處に充ち滿ちたり。

大正八年一月、英・米・佛・伊・日五强國を始め、各國の講和全權委員佛國巴里のヴエェサイユ宮に會し、辯難審議百數十日を費し、六月に至りて、漸く國際聯盟規約並に講和條件決定し、獨墺國は全部其の條件に服從し、茲に其の局を結べり。

數字ニ表ハレタル大戰

	聯合軍	敵軍
交戰國	廿四個國	四個國
戰費	二千二百六十一億圓	九百十億圓
動員兵數	二千三百五十萬人	二千萬人
戰死兵數	四百九十萬人	二百九十七萬人
傷痍者行方不明者	六百八萬人	六百七十四萬人
艦艇喪失	二百七十四隻	三百四隻
軍事公債發行額	四百九十一億圓	四百二十八億圓
戰爭期間	千五百六十七日	

然りと雖、世界列國の關係猶安定を得たるにあらず、其の利

害互に相反するものあり。戰後に於ける經營企畫、亦容易ならざるものあり。加ふるに人心の動搖、思想の變遷甚しきものあり。國民たるもの、此の際に處し、其の歸趣を誤ることなく、忠君愛國の精神を養ひ、勤儉産を治め、忍耐業を勵みて、國富の增殖、國力の充實を計り、以て國運の發展、社會の進運に貢獻せざるべからざるなり。

二五、日本の使命

大西　祝

世界の文明は之を全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し發展す。而して、各國歷史の河流は、遲速の別こそあれ、遂には世界歷史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。

傳播
蠻夷
剝奪
抱負

唯其の世界の文明に力を致すに於て、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔、猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝、學術を傳播するを以てその天職とせり。羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲擊を受くる曉に於て、なほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建てゝ精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の歐米人を見るに、英人は、己が運命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學、及び政治の上より世界に一大寄與をなすを以て其の抱負とし、佛人は人間的

寄與

悟了

の思想感情を世界に弘むるを以てその任務とするが如し。

日本は世界の文明に對して如何なる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者・先覺が深思熟慮すべき一大問題なり。世界の大勢は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか。大勢は無聲・無形なり。識者・先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民に宣傳するあらんか、國民の心は譬へば堰かれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。我が輩は一日千秋の思をして、日本國民將來の覺悟・抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

經世

權謀術數

說破

然れども、我が輩姑く明治維新時代に立ち返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたる所を見る時は、其の中猶わが國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を說破し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の

陋見　駸々　熱狂

改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來、日本が駸々として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。

我が輩は日本人に種々の缺點あるを知る、日本人は猶幾分の修練と困難とを經過せざれば、決して大國民となる能はざるを知る。然れども、世界中に於て大義名分の爲に熱狂し、忠誠の爲に一身を拋つこと土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は輕卒の擧動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を爲すに於て極めて敏速に、死して

氾濫　掃蕩

悔なき事、日本人の如きは、世界國民中多くあらざる所なり。日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは、道德上の教訓には非ざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私欲の氾濫を排除する一大任務を有し居るには非ざるか。日本帝國が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に薫化せられ、君臣・父子・夫婦・朋友の道正しく、大體上よりいへば、殆ど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大に世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、

世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與には非ざるか。我が輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警醒する大抱負・大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるものなり。（大西博士全集）

二六、卒業式の歌

森本常吉

一

（合同）學びのわざし　今卒へて、
はえあるむしろに、　あかしのふみ
たまはりぬ、　嬉しとも嬉しや。

（在校生）名殘惜しや、
（卒業生）さきくゐませ、
（合同）さらば。

二

（卒業生）女の道も　一わたり
學びしかひには、　皇國のため
家のため　身を捧げつくさん。
（在校生）名殘惜しや、
（卒業生）さきくゐませ、
（合同）さらば。

三

（合同）手をとりかはし、　朝夕に、
睦みしはらから、　別るとても
忘れじな、　學びやのみかげを。
（在校生）名殘惜しや、
（卒業生）さきくゐませ、
（合同）さらば。

日本女學讀本卷八終

大正八年十月二十五日印刷
大正八年十月三十日發行

日本女學讀本全八册
定價　卷一より卷四まで各金參拾九錢　卷五より卷八まで各金參拾參錢

不許複製

編者兼發行者　帝國婦人協會
東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷參百九拾壹番地
代表者　井出豐作
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社
發賣所　東京市神田區錦町一丁目　振替口座東京四九九一番　株式會社明治書院
電話神田二三九八番

下関
523